
不死身君の騒がしい日々

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死身君の騒がしい日々

【Nコード】

N6110C

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

とにかくギャグだけを考えての作品です。主人公は不死身それから秘書だの悪魔だの殺し屋だの精霊だの……あらゆる人(?)と交流するまあ正直あらすじは役に立ちません、ただ言えるのは……

- ・主人公はバカでモテます。

日々「みんな朝」(前書き)

今回は短いです。

日々「こんな朝」

超能力、特殊能力、極普通の人間には到底手に入れられない力。おそらく凡人の大半はそんな力を欲しているだろう。

「瞬間移動」「透視能力」「念力」……。

たった一つでもいいから欲しい。

きっとそう思う人も少なくない筈だ。

だが、

たった一つ、

あまり好かれない能力がある。

一時期は誰もが欲しがったであろう。

権力、金、その次は〇〇！！

王様や貴族などは血眼になったであろう。

「欲しい！！」と貪欲であっただろう。

しかしこの力は、

あまりにもリスクが高い。

なおかつ、

「永遠」と言う「地獄」が待っている。

そう、その力こそ……。

「不死身の力」

今だかつて誰も手に入れず、
そして必要とされなくなった力。
だが、この現代に、
そんな力を手に入れた……。
いや、手に入れてしまった。

……。バカな奴がいる……。

日本の首都、東京都。

朝8:30

超高級マンション「富宝マンション」

ここに住む一人の中学生。

「富宝由貴」男、

血液型はO型。黒のショートヘアで女顔、よく女に間違われる。
性格はお人好しだが極度のバカ。
華奢な体で特に運動は出来ない。
親は「富宝財閥」父が社長で母は専務。
由緒正しき血統で大金持ちである。

「プムプム」

かれこれ1時間半鳴り続けている時計。

「ん？朝？」

のんきに起きる由貴。

で

「のわあああ！……！寝坊だああああ！……！」

威勢のいいかん高い声が響いた。

「どうしよう！！9月に入って「もう遅刻するな」って言われたのに」

入学当日から遅刻で一ヶ月に19回は遅刻をするという記録保持者。仕方なく歯磨き洗顔、身支度をし朝食を抜く事にする。

「よし！行つてきます！」

ジャスト5分で行こうとしているが……。

なぜか窓から身を乗り出す由貴。

ゆづに100階はあるこのマンションの最上階から乗り出すとは、命知らずどころではない。

「ひゃっほい！」

元氣よく飛び降りる。

刻一刻と地面に近づく、

普通は死ぬ、いや、死ななければおかしい。

「ドン！」

「着地成功」

すばらしい、これでマンションをエレベーターで下りるより窓から直接落ちたほうがおそろく3分得をしたことになるって！！
生きている！？

「おつて急いじつと」

……

そう、何を隠そう、

彼は……

不死身なのだ。

「やっと着いた〜」

馬鹿でかい校門に金で彫られた校紋。

『空波学園』

さすが金持ちの通う学校だけある。

校門をくぐれば今はただの木の桜の木が20本並べられている。

その長い道を過ぎればグラウンドがある。

だがそのデカさが尋常では無い。

横3000m縦1500mの「なんじゃそりゃ」としか言いようの無いグラウンドを超えて

やっと校舎が見える。

でかいはでかいのだが余分な部屋があるだけで

特に普通とは変わらない校舎。

急いで中へ入り自分の教室へ急ぐ。

1-R

「間に合ったあああああああ!!!」

馬鹿でかい声でドアを開ける。

「バカ野郎!!!もう一時間目はじまつとるわ!!!」
ちなみに校門からこの教室まで20分かかる。

「先生!!!違うんです!!!理由があるんです!!!」

「なんだ?言ってみろ」

「宇宙人が攻めてきたんです!!!」

「お前先月もそう言っていたよな?」

すでに血走っている目、

血管の浮き出た額、

不良先生とあだ名のついている三浦先生は、
そりゃもう誰もがわかるくらい怒っていた。

「また攻めてきたんです！！」

空気も読まずに大胆発言。

「お前反省文100枚明日まで、いいな」

泣きながら謝る由貴だった。

日々2「こんなお友達」(前書き)

親友登場！

由貴は彼にべったり。

日々2「こんなお友達」

お昼休みの教室、

「反省文100枚なんてできないよ」

泣きながら2枚目を書く由貴。

「仕方ねえだろ、お前が自分で引き起こした事だろ」

親友の那鎧彰楼、
ながいしやうろう

名前と鋭い眼つきの外見ではハーフと勘違いされやすいが純日本人
不良で茶髪の喧嘩上等精神。

ニツクネームはしよう。

「ひどっ!!愛する親友に向かってその言葉!!お前は人間か!!」

「ああ立派な人間だ、あと親友ではあるが愛はない」

「わああああ!!!!しようがいじめるうっ!!!!」

「ば!!!!バカ!!!!黙れ!!!!ちよっ!!!!いや違うんです!!!!」

泣いている女の子っぱい子の近くで弁解しているガラの悪い少年が
いれば、

『あ、いじめだ』と言われても仕方がない。

「わ、わかった!!!!悪かった!!!!だから泣きやめ!!!!あいつに見つ
かると!!!!」

すでに真っ青な顔で鋭い目つきを柔らめ必死に頼むしよう。

「しょう、なぜ私の由貴が泣いているの?」

遅かった!!!!

心の中で叫ぶしよう、

金髪のロングセミでかわいい笑顔を見せる美少女。

その両隣には赤い髪と青い髪の良く似た美少女がニコニコ顔でいる。

金髪の美少女は「鷹世ルリ」
たかせ英国と日本のハーフ。

由貴のファンクラブ会長。

赤い髪の子と青い髪の子は双子で「由貴&しょうファンクラブ」会員、

赤い子は「句須見シャン」青い子は「句須見蓮」

家が訳ありのためシャンはフランスと日本のハーフ、蓮は純日本人である。

「あ……い、い、い、いいいや……その……え？」
すでにパニック状態のしょう。

「しょうが反省文手伝ってくれないよ」

由貴が茶々を入れる。

「ばか！！そんな事言ったら！！」

「あらしょう、もちろん手伝ってあげるわよね？」

美少女の後ろでは黒いオーラと共に双子が笑顔でしょうを見つめる。

「「しょう〜う〜君」「」

双子の可愛い声が聞こえたあとしょうは無意識に答えた。

「手伝うよ由貴！！」

下校時間、

商店街を通る2人。

「よかった、もう85枚書いたから後15枚でいい、ありがとうねしょう！」

「冗談じゃねえよ、お前ほとんど書いてないだろ」

ニコニコの由貴と対照的な血管の浮き出た怖い顔をしているしょう。
お気づきだろうが由貴には人を怒らせる力もあるようだ。

「ねえ、しよう」

「んだよ？」

ふと真剣な表情になる由貴。

「お願い事があるんだ」

「・・・なんだ？」

グイッと顔を近づける由貴。

そして・・・。

「・・・残り15枚手伝って」

おねだりの笑顔。

「ボコッ　！！」

電柱に頭をたたきつけられた由貴。

見事に電柱には亀裂が入り由貴にはでっかいたんこぶが出来た。

「ひどいよ、僕だって痛いもんは痛いんだよ？」

「不死身のお前なら無事だ」

さすが親友、すでに由貴の能力を見切っていた。

「じゃあせめて部屋に来て」

「なんでだよ？」

「一人は怖い」

「安心しろ、幽霊だろうと強盗でもお前は死なん」

「ふええ〜ん！しょうがいじめる〜！！」

「だあああ！！泣くな！！おい！！ちよっ！！いや！！違うんです！！」

また他人からいじめると誤解されるしよう。

これほどストレスの溜まる役はめずらしい、なおかつ可哀想である。

「はあ・・・わかった・・・行くよ」

「わーい！！」

泣いたり笑ったり連続である。

富宝マンション。

最上階、特別室。

さすが最上階だけあって豪華である。

「さ！ゲームしよ！！ゲーム！！」

「まずは反省文だ！遊びはその後！！」

優等生のような事を言うしようだが一応不良であるらしい。

「くそ、やっと終わった」

「終わった？ありがとう」

「……？、おい」

「え？……え！！ちょ！！何怒ってんの！？」

しようから沸き立つ殺意やら怒りやらのまがましいオーラが鬼の形を作っている。

本人の顔も般若面並に恐ろしい。

そりゃ由貴のやるべき反省文をなんだかんだで98枚書いたのだ、怒らない人間は人間ではない。

「ゴンッ！！」

しようの鍛え上げられた拳が由貴の頭にたたきつけられる。

「ふしゅー」

よほど強烈だったのか気を失う由貴。

「しばらく寝てる！！」

怒りつつ高級なソファーに横たわるしよう。

「やべ、オレもねそ」

そのまま夢の世界へ……。

「ん？しよう？……寝ちやつた？」

ちやつかり起きる由貴。

「ん、つまないなあ、ファ……あ、僕も寝不足か」

ベットで寝ようかと思ったとき、

「ん？そうだ！久しぶりにしよう君と寝よう」

高級なソファは普通より大きかった、

なるほど、そう体の大きくない2人ならちよつと仲良く寝れそうだ。

由貴はそつとしょうの隣に寝転びしょうに抱きつく。

まあ、悪気はないのだろうか・・・。

女の子っぽい子とイケメン少年。

仲良く添い寝。

全く無関係の人から見ればカップルだが。

由貴を男だと知っている人は・・・。

誤解するに違いない・・・。

別に本当に由貴はただ純粹に親友と寝ているつもりだが・・・
さて、起きた時どうなるやら。

運が悪いのかどうなのか、

由貴はメールが来た事を知らない。

ケータイは電話の横、

朝あわてて出たため、

『本日、秘書がそちらに参ります。詳しい事は彼女に』
という、知らせがあることを。

まだ知らない。

日々3「こんな秘書」

灰色のスーツに黒のサングラスをかけた、正直めちやくちや怪しい女性が歩いている。珍しい緑色のポニーテール。スタイルも抜群であるのは見た目で分かる。

彼女の名前は「エリー・笹音」（なひね）

護衛術を完全マスターの自称「西洋の武道家」

剣道、柔道、空手、合気道、杖道、棒術、カポエラー、太極拳。

女性であるにもかかわらず、その技術は男すらかなわれない。

アメリカの日系人として生まれ、

父が武道家のため幼いころから武術をたしなんできた。

今は秘書免許も取り、秘書兼護衛として富宝財閥の専属秘書となり、初仕事として社長の息子の秘書を言い渡されたのである。

富宝由貴様、学校の成績も悪く一人での生活が不慣れ・・・なるほど

事前に渡された由貴の資料を見るエリー。

あら・・・かわいい・・・これはラッキーかも

いくら年下とはいえ男と女の一つ屋根の下の生活には苦痛を感じたが、

これほど女の子っぱいなら逆に大歓迎のようだ。

マンションに着きあらかじめ持っているカードで入りエレベーターで上がるエリー。

あら？・・・注意事項、特殊能力が備わっているが驚かず自分の仕事を遂行する事

特殊能力には驚いたが規則にあるべき事柄は守るのが仕事、

アメリカでの軍事演習に比べれば軽いと踏んだエリーだった。

「この部屋ね、カギは・・・あった」

「ピッ」

ハイテクのためカードがかぎとしての効力を発揮する。

怪しまれないためかつ隠密行動のためここまで来たエリー。

近所にもエリーの存在は秘密のため極力他人との接触は避けた。

だが、目の前に由貴と仲良く寝る少年・・・。

・・・予想外!?

友達か!?!確かに由貴から抱きついていてるため危険人物ではない模様!

外見からしてハーフなのか?服装は前の開いた制服、

どうやら優等生ではないようだ。

だがまずこの状況をどうする!?

まだ2人は起きていない!違う部屋に隠れる?

外へ出る?・・・起こす?

どうするの?・・・どうしましょう!

慌てるエリーをよそに仲良く眠る2人。

エリーはふとその光景を見てこう言った。

・・・目の保養に

ちよつと好奇心のためか見入ってしまうエリー。

・・・なんだか・・・どつちも可愛い・・・!!!

自分は何を考えていたんだと自問するエリー、

だめよ!落ち着きなさいエリー、冷静でないと間違った判断を起

こすわ、まずはリラックサ深呼吸よ、・・・落ち着いたわね

一人だけでこんなに疲れてしまった事に恥ずかしがるエリー、

「・・・ん？・・・なんか起きちまったなあ」

バッドタイミングで起きるしょう、

それに気がついたエリー、

「え！？」

「ん？」

見つめ合う2人・・・。

「あ、あの〜？」

しょうが口を開いたが、

「ち！違うんです！わわわ私は怪しいものじゃ！！あの！その！えつと！！え！？」

どことなく自分に似ている感じがして親近感を覚えたしよかった。

「わかってますよ、サングラスにスーツでここにいるってことは由貴関係の人でしょう？」

助け舟を出すしょうのお陰で落ち着くエリー、

「すみません慌ててしまい、私、本日付から由貴様の秘書兼護衛のエリー・笹音です」

「那鎧彰楼です、しょうって呼んでください、ちなみにハーフではありません」

「え！？あ！そ、そうなんですか！てつきり、すみません」

「いや、いいですよ・・・あれ？由貴は？」

「え？しょう様の隣に」

「・・・」

固まるしょう、

もしかして・・・一緒に寝てた？

腕が腰に回ってある、抱きついていたのか！？

「・・・・・・・・」
言葉を失うしよう。

「な、仲がよろしいんですね？」

浅い友なのかと問う目線で訊くエリー。

「は、ははは、いやー、そうですか？」

目が死んでいるしよう。

「では、改めまして本日付で由貴様の秘書兼護衛を勤めさせていた
だくエリー・笹音です」

あの後しよは平手で由貴を起こし、

寝ぼけ眼で話を聞く由貴がやつと事を理解し現在に至る。

「そうなんですか、行き成りだからビックリしちゃった」

「いつビックリしたお前」

突っ込みをかますしよう。

「おかしいですわね、確か連絡を朝メールでしたはずですが？」

「え？」

「やっぱお前の性だろ、つたく、だから朝早く起きろって言うてん
のに」

「あれ？この大量の原稿は？」

反省文100枚の束を見つけたエリー。

「ああ、それね・・・」

「ってわけでしょう君にちょっと手伝ってもらって書いたの」

「98枚のどこがちよっとだ！！」

「・・・・由貴様・・・」

「え？」

真剣な顔に悲しそうな目をするエリー。

「これほどまでに学力の低下、生活の不規則、他者への迷惑が募っ

ているとは思いませんでした。きっと幼少の頃より一人ぼっちのため、こんなにも社会不適合者になってしまわれたんですね。ですがご安心を！私が来たからには一刻も早い社会復帰と富宝家後継者として立派に鍛えて差し上げます！！」

「え？ごめん、聞き取れなかった」

「こら、逃げるな由貴」

「さあ！まずは勉学に励みましょう！！」

「え！！だめだよ！今からしよう君とゲームを！！」

「だめです！ゲームなんて今後一切禁止いたします」

「そんなあゝ、しょう君助けて！！」

半泣きで助けを求める由貴。

「いけません！他者には頼らず！己の力でやるのです！！」

「ん・・・まあ、じゃ、オレ邪魔だから帰るわ」

「しよ〜う〜」

「さあ！由貴様！教科書を！」

マンションを出たしよ〜う、

「可哀想だな由貴も、ま、仕方ないだろ」

だが、その発言が不幸を呼んだ。

「しよ〜う、なぜ由貴が可哀想なのかしら？」

こ〜！この声は！！！！？

日々4「こんな家庭」

「質問その1、由貴が可哀想ってどういうこと？」
ルリが笑顔で訊く。

「べ、別に？な、なななんにもないぜ」

声がつわずってしまったしよう。

「質問その2、30分26秒前に入った初めて見る女性は誰？」

「はい？なななんのこことですか？」

「私はマンションの住人を知っている、でもその人だけ知らない」

「だ、誰かの友達かお客さんじゃ？」

「入る時にセキュリティシステムとして玄関で相手認証を受けるはず、なのにその人はそんな事もせず、住人が持つカギで入った、ちかく引越するとも聞いていないし、ここ最近引越したラックも来ていない、引越しでもなくお客でもないなら・・・」

「考えられる線はこのマンションの持ち主、富宝関係者であると
考えられる」

何だよその驚異的洞察力！！??

これだとシャーロック・ホームズもびっくりだ。

その前になぜここですつとこのマンションを見ていたのか、
ストーリーまがいなら犯罪である。

「わ、わかった、言うよ、その人は由貴の秘書だとよ」

「男？女？」

「なんでそんなことを聞く？」

「男だったら由貴を襲わないか心配なのよ」

「女って言ったら？」

「由貴を恋人にしないか心配なのよ」

「それってどっちにしろ秘書はいらないって言いたいのか？」

「私が秘書になって四六時中、由貴といたい」

「いくら美人でもそんな性格じゃあ由貴も付き合いたくないだろうな」

「今なんていった？」

「しまったと思った時には遅かった。」

「ぎゃああああ!!!!」

しよこの断末魔の叫び声が聞こえた。

「とにかく！由貴を助けなきゃ!!」

なぜか頭に大量のたんこぶを作ったしよこの下敷きによからぬ事を考えるルリ。

「ま、まで、これは由貴のために必要な事だろ」

「いいえ！秘書なんていらないわよ!!」

「までって」

しよこの言って真剣な顔になるしよこ。

「・・・知ってるだろ、あいつが小さい頃から親が働きっぱなしでずっと一人だったの」

ルリの表情が曇る。

「わ、わかってるけど・・・」

「あいつだって寂しかったはずだ、一人で夜過ごすのだって、あの性格だろ？真剣に泊まってくれて俺も何度も頼まれたが家の事情があるんだ、そんな時、やっとあいつに同居人が出来たんだぜ？・・・俺たちは学校で接してやればいい、それでいいだろ？」

「・・・そうね、ちよつと焦っていたわ」
安堵の溜息を吐くしよこ。

「いいわ、これですと私が見なくても、由貴はさびしくなくなる

のね」

「……ずっと見てたのか？」

「入学式で初めて見て一目惚れしたときからずっと」

「……極度の愛は逆効果だぜ」

「愛が全て、何か問題でも？」

「……いえ」

「よし、ではお食事にいたしましょう」

「ふえ〜、やっと終わった〜」

勉強に一区切りした由貴たち。

「お食事はどうしていたのですか？」

「え？お店に電話すればすぐ持ってきてくれるよ」

「ま、まさかずっと、外食を？手料理などは？」

「……食べた事ない」

シユンとなる由貴、

どんなに裕福でも、手料理を食べた事のない由貴を可哀想に思ったエリー。

不憫ですわ……ここは

「由貴様、私がお料理します」

「え？エリーできるの？」

「もちろんです！では、何にいたしましょう？」

「カレー！」

温かい、家庭のようなものを感じた由貴。

「えへへ、たのしみー！」

こんなにうれしい事をこの部屋で感じたのは、もしかすると初めてだったのかもしれない。

日々5」こんな買い物」

「しょう君！学校終わったなら買い物に行こ！」
由貴が笑顔でしょうを誘う。

「ああ、いいけどオレ池波と遊ぶ約束したから池波とでいいか？」
「うん！もちろんいいよ」

こうして、由貴は初めてのおつかいをする事になった、事に付きあ
わされる事になったしよかった。

「ようしよう」

「おう、池波か」

「由貴は来たか？」

「もうすぐ来るだろ」

私服に着替え集まる3人。

ちなみに、池波いけなみしえおつらう紗央狼、日本と中国のハーフ。

きつね目なのが特徴、しょうと由貴の友達。

「買い物ってゲームか？DVD？マンガ？」

「さあな？あいつのことだ、変な買い物じゃないといいが」

「ん？オウ！来たよ由貴」

池波が最初に気づく。

しょうが振り返ると、

「ごめん」と言って走ってくる由貴がいた。

「まった？」

「イヤ？おれは待ってないよ」

「まあ時間通りだからいいさ、はやく行こっぜ」

ここで私服チエツク！

しょうは黒いシャツに白い龍の絵が描いてある。
首に銀のアクセサリーをぶら下げ、
ズボンは濃い緑色のだぶだぶの長ズボン。
池波は赤いシャツに黒のベスト、
キャップはヤンキースのロゴが入ったもの。
ズボンは青いジーンズ。
由貴は白いシャツにでっかい桃色のハートが描かれたものに、
銀色の腕輪、そして緑色の小さなリュックをしょっている。
ズボンは黒のノーマル長ズボン。
以上私服チエックでした！

「で、お前は何がほしいんだ？」

「確かね、英語辞書と論文集の本と参考書」

「・・・ほんとに欲しいノカ？」

「全然」

沈黙が流れる。

「じゃあ！！なんで買っただよ！！」

「だってエリーさんが買ってきてくださいって」

「ああ、由貴の秘書サン？」

とりあえず書店へ、

「ま、書店ならマンガもあるし、いいか」

しょうは最近流行のマンガ売り場へ、

「ねえ、しょう」

「何だ？参考書とかあったか？」

「多すぎてどれかわかんないよ」

「仕方ねえなあ・・・あれ？池波は？」

「え？なんか・・・ホラー小説探すって」

「ふん、で、参考書コーナーは？」

「こっち」

「これかな、それともこれ？」
由貴が本を手に取りしように訊く。

「・・・お前その本のタイトル読んでみる」
「え？『ジャックの豆の樹』と『かぐや姫』もしかしてしよう読めない？」

「読めてなおそれを参考書と言い張るお前がおかしい」
「え？ちがうの？」

「お前絵本と参考書は同じものだと思っているのか？」

「なんか面白そうな本だから」

「発殴つて参考書コーナーに連れて行くしよう。」

「ナイネ、店員さん呼ぼうかな？」

参考書の前でホラー小説を探していた池波が悩んでいる。

「どうやらホラー小説を参考書のコーナーで探しているようだ。」

「おい、そのバカ！」

「ん？しょうか、バカとは失礼だな」

「ここでホラー小説探している奴をバカと呼ばないでなんと呼ぶ」

「え？ここじゃないの？」

「ちがうよ、おつちよこちよいだな、しえろつは」

「参考書と絵本間違えるお前もな」

しょうが突っ込む。

「どうだ？決まったか？」

「ねえ、『万物の数学』と『小学生の算数』どっちがいい？」

「お前にはどっちも理解できねえだろうな」

「ひどいよ！冗談に決まってるじゃん！」

「だよな、さすがに算数は分かるよな」

「『万物の数学』は簡単だから『小学生の算数』買おう」

「やっぱバカだと思ったしよかった。」

「あれ？なんだか向こう騒がしいね」

『お客様！落ち着いてください！』

『落ち着けるか！！早くホラー小説ダセヤ！！』

『ですからこの棚ではなく！』

『あああ？ない？ないのか？何だこの書店！！品揃えワル！！』

「・・・池波だ」

駄々をこね大声を出す池波に拳をぶつけ黙らせ店員に謝るしよう。

「なんだ、お料理雑誌コーナーだったのか」

「もうしえろうはおつちよこちよいだな」

「お前らこれ以上迷惑かけたら・・・殺す」

鬼の顔で怒るしように2人はただ、

「はい」

としか言えなかった。

「ふ、さ、お会計しよ」

由貴が満足そうにレジへ向かう。

「じゃあ、おれもこれでいいか」

「お、しょうも決めた？由貴は？」

「もうレジにいったよ」

店を出る3人。

「ねえねえ！しょう君何買ったの？」

「ああ、マンガ3冊、おまえは？」

「英語の辞書と論文集の本と参考書と絵本2冊！」

絵本2冊はかわいいなあですむが、他の本のタイトルを見たしうは固まった。

『中国語辞典』 『作文の書き方』 『小学生の算数』

「・・・何も言うまい」

「え？なんか言った？」

「いや」

「オレはこれを買ったんだ！」

今度は池波が買った本を見せる。

『万物の数学』 『英語辞典』 『代表的論文収録本』 『手作りお料理
四』

ホラー小説じゃねえじゃんと思ったしよかった。

だがこつそり由貴の本と池波の本をすり替えたのは言うまでもない。
きつと友情ゆえの行動であろう。

ちやつかり『手作りお料理四』を入れたのは、
しょうのちよつとしたイタズラのようだ。

日々6「こんな紙芝居」

「ねえ！ねえ！みんな！僕の紙芝居見て！」

家に遊びに来たしょう達に紙の束を片手に言ってきた由貴。

「では！『勇者ユキ！桃太郎と対決！』始まり始まり〜！」

早速おかしいな

しょうを始めルリにエリーにシャンに蓮に池波が心の中で突っ込んだ。

「むかしむかし、あるお城にかっこいい王がいました、名前はしえろうキングです」

「ぷつ、しえろうキング？アハハ！誰だヨ」

なぜか爆笑の池波。

お前だよ とつつこむしょう達。

「しえろうキングの治める国は平和でした、しかしある時桃太郎が攻めてきたのです」

桃太郎悪役かよ

「無残にもボッコボコにされたしえろうキングは民にも見放され一人になりました」

え！？一人で対抗したのか！？ しょうが驚き言う。

むしろ英雄ね 落ち着きながらルリの感想。

見放す民・・・残酷だわ 今後の教育方針を考えるエリー。

あはは！！しえろうキング弱え〜！！ 自分の事だと知らず馬鹿にする池波。

蓮、桃太郎って悪い奴なのね シャンは桃太郎を誤解する。

お姉さま、桃太郎は英雄なんです 軌道修正をする妹。

「森でさまよっていたしえろうキングの前に旅人姉妹シャンAと蓮

Bが現れました」

私たち!?

「『これより西へ2キロ行けば勇者に会えますわ』とシャンAは言います。しかししえろうキングはそんなに歩けないと言いました。

『もつと近くの勇者を教えてくださいヨ』」

なんとバカな頼みだな

2キロっていつの時代ですか?

傲慢さが現れていますわ、描写は合格ですね

最後のヨってなんだヨ!あはははは!!

なぜA?

.....B.....

「『近くの勇者なら東へ50000メートルですよ』と蓮Bが言いました。しえろうキングは『キロは無理だがメートルならいい!礼を言うぞ!』と喜んで言いました」

バカか!!もつと距離伸びたぞ!!

朝三暮四ね、損な事に気づいてないわ

人をだます行為・・・いけませんわね

おお、しえろうキング頭いいナ

蓮!!人を騙すなんて!!

お姉さま、これは紙芝居ですよ

「しえろうキングが飲まず食わずで50000メートル歩いていると小さな村が在りました。『だ、だれか・・・水を・・・』そういつてしえろうキングは倒れました。それに気づいたのは勇者ユキと子分のシヨウと仲間のるりとえりいです」

誰が子分だこのやろおお!!!

ひ、ひらがな書き!?

飲まず食わずなんて・・・上手く単語が使えているわ

だらしね!たった50000メートルで気絶かヨ

「素晴らしい出来だったわ」

しょうはぶち切れ、ルリは気に入られるため褒めて、
エリーは真剣に評価し、句須見姉妹は後半聞いていなかったためと
りあえず褒めて、
真剣に感動したのは池波だけだった。

「よし、今度はどんなお話にしようかな」
「もう作るな!!」

日々6「みんな紙芝居」(後書き)

次回、悪魔登場。

日々7「こんな悪魔」

地獄

まあだからって特に変わったところはない。
常に来る魂から悪を取り抜くための世界。
人間界と特に変わらない景色だった。

その住人悪魔、彼はまだ中学生の自称不良。黒の悪魔帽子に黒いローブ。

金色の目に、はみ出た金髪、なかなかイケメンだ。

「おい！死神！」

「な、何だよ」

死神、悪魔の友達、気が弱い。灰色のローブとドクロの帽子。

「デットゲームしようぜ！」

「だ！ダメだよ、あれやると閻魔さんに怒られるよ」

「大丈夫！大丈夫！閻魔の息子はオレだぜ？何とかなるって！」

デットゲームのやり方！

とりあえず生きている魂の写真をよく混ぜジャイケンで負けた人はその写真から一枚引き、

引いた人の魂を奪うという残酷ゲーム。ちなみに禁止行為。

無駄に魂をぬく事は許されない。

だが悪魔はもうすぐ死ぬ人間をチヨイス……のつもりだった。

ジャイケンの結果、悪魔の負け。

「チツ、しゃーねーな」

一枚無造作に引く……すると。

「あ……ああ？」

「こんな悪魔の様な派手な服を着た泥棒がどこにいる!?!」
自分で言ってしまった悪魔。

「まあ、どっちにしろ、来た理由が由貴さまの命を奪うためなんて
・・・」

「無駄だったわね」

いつの間にか由貴の能力を知っていたエリィ。
その台詞にうなだれる悪魔。

「とにかく、そうなら仕方がない、地獄に帰る」

悪魔は早々と退散しようとして下門を開こうとするがしかし・・・。

「あれ？開かん?・・・ちよ！携帯携帯」

悪魔でも携帯ってあるんだな。

「あ、もしもし、死神？あのさ、下門開かないんだけど？」

『当たり前だよ、閻魔さんが閉めちゃったもん』

「だったら開けてくれって頼んでくれ、息子が帰れなくなっている
って伝えれば」

『意味ないよ、閻魔さん、デットゲームをした息子に罰を与えるっ
て事で人間界に修行へ行かせるって言うてるもん、いいって言うま
で』

「・・・は？ちよ！お前もやったろ!」

『閻魔さん時眼で悪魔くんの強引さが悪いから許してあげるだって、
僕だけ』

「な！納得いかねえよ!!なんだ!?!この世界にいろってか!?!」

『ま、そう言うこと、じゃ』

「あ！まで！おい!・・・もし・・・もし?」

絶望に暮れる悪魔……。

「う、う……」

見た目によらず泣き虫なのか顔をつずくめる。

「……どうしたの？」

エリーが気ますぐなり訊く。

「ひっく……おうちに……ひっ……帰れない……う……」

「……」

こうして住人が一人増えた……のだった。

「悪魔……？」

「そうなんだよ、結構掃除が上手でね、あとクッキーが焼くのがすきなんだ」

「……それって悪魔なの？」

今日は珍しく、しょうと由貴と蓮と一緒に帰っていた。

「研究発表の打ち合わせも僕のマンションでやるっよー！」

「ま、いいだろ」

「そうね、その悪魔って言う人にも興味あるし」

富宝マンション

「ただいま」

由貴が元気よく声を出す。

「おかえりなさいませ」

エリーが返事をする。

「お邪魔します」

「おじゃましま〜す」

続いて2人が入る。

「で、悪魔くんはどこ?」

蓮が興味心身で訊く。

「確か……クッキー焼いているかな?」

「ええ、確かにクッキーを焼き中ですわ」

確かにクッキーの匂いがキッチンから漂ってくる。
なかなか美味しそうな匂いだ。

「由貴帰ったのか?」

ハスキーな声がする、

「ただいま、今日のクッキーは?」

「特性チョコクッキーだ、楽しみにしてるがいい」

「わーい!」

「あの声が悪魔?」

「……なんか信じれませんわ」

「でも本当ですよ」

エリーが書類を片付けながら言った。

「宙にも浮けますし、魔法のようなものでお掃除いたしますし、ま

あ容姿は普通なのですが」

そうこう言っているうちにクッキーを持った、

金髪、金色の目の同年代の子が宙を浮きながら来る。
服装は悪魔というより子悪魔のようだ。

「む、これが友達か?悪魔だ、よろしくな!」

屈託のない笑顔で握手を求め……

「よ、よろしく、那鎧彰楼、しようって呼んでくれ」

「はじめまして……句須見蓮です」

常識人の二人にとっては少し苦しい理解。

「ま、とりあえず！オレのクッキー食ってみてくれ！」

眼に前のチヨコが入ったクッキー、

「いったただつきまーす！」

早速食べる由貴、美味しそうに食べている。

「じゃあ、いただきます」

「わ、わたしも、いただくわ」

まあ由貴も食べてるしと思ったのが間違いだった。

「「パク」」

・・・まずい

・・・まずいですわ

そう言つてぶつ倒れた2人。

その殺人的不味さに常人は適わず、不死身である由貴だけ美味しく
いただけた。

「うゝ・・・ひつく・・・やっぱ不味いのか・・・」

「ほら、泣かないでください、とりあえず2人を元に戻しましょう」
そつと優しく頭をなでるエリーだった。

日々「こんな悪魔」(後書き)

テストが近いためお休みします。
申し訳ございません。

日々8」こんな運動短距離編」(前書き)

テストからの復帰作です。

というかもろすぐ受験です。 b Y A T U R A

日々8「こんな運動短距離編」

「もうすぐ体育大会だ」

富宝マンションで円満の笑みで言う由貴。

「た、体育大会？」

もう馴染んだ悪魔が興味心身で聞いてくる。

「もうそんな時期ですか、ところで由貴様運動は？」

「え？」

「ですから、速く走れたりなど」

その質問をした途端黙ってしまった由貴。

「……できないのですか？」

「……まあ、上手ではない……です」

50m走、10秒64・

上体起こし、3分で16回

腕立て、3分で14回

反復横とび、23回

握力、15キロ

ボール投げ、14m

一通り体力テストの結果を聞いたエリーはまた深刻な顔になった。

「勉強だけでなく運動まで悪いとは……」

「オレ様はもつと速く走れるぞ」

「え！？どれぐらいどれぐらい？」

「50m10秒21だ！」

変わらないですよと心の中で突っ込んだエリーだった。

「せめて50m10秒はきりましょう！」
案の定改善しようと思くなるエリー、そして・
「特訓です!!!」

川の隣に位置するグラウンド。

野球グラウンドにテニスコートがある広めの空き地。
とりあえずスウェットに着替えた3人、
そして当然の如くしよう、そして池波が呼ばれた。

「ちなみに、しよう様と池波様のタイムは？」
しよう、7秒22・池波7秒23・

「さすがですわね、では！由貴様、まずは一度走ってみてください」

「オレ様もか？」

「ええ、悪魔様も」

由貴、悪魔

「位置について、よゝい、スタート！」

反応が鈍く、2人ともスロウスタート、

由貴は手を胸に持っていていき女の子走りになってしまっている。

悪魔はがんばっているが足の着き位置がばらつきぎこちない走り。

結果、仲良く10秒65・

「ナンだよ、足の運びがなってないぞ」
まず池波のアドバイス。

「いいかい？短距離走では足の運びが重要なんだ、特に悪魔は足の着く位置を考えたほうがいい、そして、何より速く走る方法として重要な事は何か知ってルカ？」

「え？んんんわかんない」

「うーん、知らん」

「だめだな、足の運びは、まず右足を出す、そしてその右足が着く前に左足を出す、そしてまた左足が着きそうになったら右足を出す、この運びをすれば少しは速くなる」

「出来るかそんな事！」

しよのツツコミが入る。

「いいか、まず2人ともフォームが悪い」

「ふおーむ？」

「家を改装？」

「それリフォーム」

「相手を殴る？」

「それフール」

「虫博士で昆虫記を書いた外国人？」

「それフール」

「オオ！おれ赤色のチョコがスキダヨ！」

「それはマールだ、って全然違う！！！」

「フォームとは走る時の形、つまり走り方ですわ、まず正しい走り方は、腕をしつかり振ることですわ、そして重心はやや前、足をしつかり地面につき、蹴って前が出る」

「へえ」

「成る程な」

2回目

「よーい、スタート」

今度はフォームが正しくタイムは格段に上がった。

10秒12 .

「さあ！9秒台は目の前ですよ！」

「うーん、でももつと速くなるにはどうすればいいのかな？」

「それならいい考えがアルヨ！」

池波が思いついたように言う。

「ずばり！鬼ごっこ！これにカギル！」

「ああ、遊びながらも走って力をつけるってことか」

「おもしろそー！」

「では鬼は私が」

「さて、鬼ごっここというのなら、オレの衛兵達にやらせりゃいいよなに？と言っている4人を無視してなにやら呪文を唱える悪魔。

そして突如現れた黒い蔽ついで門、

そして中からぞろぞろと出てきた鬼たち……。

「リアル鬼ごっこ？」

「鬼ごっここの鬼をしてくれ」

「は！承知しました、ところで逃げる方は？」

「オレとあいつら、じゃ！10秒な！」

「ね、ねえ、悪魔君、あの鬼って……人食べる？」

「そんな訳ないだろ、ただ鬼ごっこをバトルロワイヤルって勘違いしているだけだ」

「それやばくね？」

日々8「こんな運動短距離編」(後書き)

なんだって本物の鬼なんか・byしろう

日々6「こんな鬼じっし」

誰もいなさそうな暗い路地、

狭く、子供2人がぎりぎり入れるといったその場所に、
しようと由貴は仲良く抱き付き合って隠れていた。

「・・・鬼いないかな？」

「わからねえ、しかもエリーさんと悪魔ともはぐれちゃった」
では、こうなってしまった経路を見直してみましよう。

数分前、

「バトルロワイヤルってなに？」

「由貴様、そんな事は知らなくてよいのです」

「ただ、捕まったら最後ってことは確かだな」

「これで足速くなるだろ！」

「もちロンだ！」

「ただね、終わらすにはあの鬼達を倒さなきゃいけないんだ」
悪魔がケロツと言う。

鬼達はいつの間にか服装を変え、黒の背広を着ていた。

よく見てみると顔はそう怖くなく、角も隠してしまった。

「・・・あれじゃあ見分けがつかんだろ」

しょうが呟く、

「10秒たちました！我々も忙しいのですぐ捕まっていたいただきます
！！」

鬼達はサングラスまでつけてとうとう走り出した。

「いいぜえええ!!!こいヤアアア嗚呼嗚呼!!!」

早速バカの池波は見境もなく鬼達に突っ込んでいった。

この瞬間を無駄にする事はない。

あっさり池波を見捨てたしよっ達はさっさと走って逃げた。

街中まで逃げた四人だが、さすが鬼である、

池波の努力空しくもうここまで追ってきた。

「ちっ、速いもんだな」

「当然だ、地獄で特別部隊最高チームを呼んだのだ、さすがのしえろうも敵うまい」

「逆に迷惑ですわね」

「えっ!!!ごめんなさい」

なんか悪魔、エリーさんになついているなあと思ったしよっだった。しかし何だかんだ言いつつ鬼はすぐそこまで来ていた。

「ちっ、由貴と悪魔が遅くて追いつかれるな」

「安心しろ、俺様の魔術をみせてやる!スモーク!」

次の瞬間周りが煙幕に囲まれ鬼達は立ち止まった。

と同時にしよっ達も周りが見えず立ち止まったがすぐがむしやらに逃げた。

で、今に至る。

「これからどうする?」

「そうだな・・・鬼を倒さないといけないのは事実だし、お前不死身だし、行くか」

「そうなるなら最初からそうすればよかったね」

「それじゃあトレーニングの意味ないだろ」

「じゃあいくかと思ったときだった。」

「見つけた!!!」

鬼達が路地に入ってきた。

「やば!!!おい!逃げるぞ!!!」

「え？戦うんじゃないの？」

「バカ！！こんな狭いところで戦えるか！！」

早々と反対側の道へ逃げたしろう達、

「さあ！きやがれ！」

早速攻撃態勢に入るが……。

出てこない……。

「……あれ？」

「な、なんで出てこないんだ？」

実はこの狭い路地、先程言った通りに子供2人がぎりぎり入るくらいのため、

大の大人の、しかもボディビルダー並の鬼が大量に入って出てこれるわけがなかった。

「……バカだ」

「あはは、でも良かったねこれで」

川沿いの広場

「見事でしたね、では我々はこれで帰ります、悪魔様、修行に精進してくださいね」

「わかつてるって！じゃあね」

後に聞いたがエリーさん達はひたすら走って逃げたそうだ。

池波は案の定ボロボロにされていたが復活した。

「全くよくやったな鬼ドモメー！次は倒してやるぜー！」

次があつてたまるか、と思つたしろうだった。

これで終わりかと思つた一行、

だがまだ終わっていないかつた……。

またあの黒い門が表れた。

行き成りの事で啞然とするしょう達の前に現れたのは、
なにやら日本の貴族が着ていたような着物をまとった大人。
顔はどちらかと言うと鋭い眼の茶髪の怖そうな兄ちゃんともいう
感じなひとで、
先程の鬼とは違う事が良く分かったが誰なのかさっぱりわからな
かった。

「パ・・・父さん!？」

パパと言いかけたことは気になるが、

その前にこの人物があゝの閻魔だと言う事のほうに恐ろしかった。

「悪魔・・・久しぶりだな」

冷酷で威厳のある言い方にすっかり固まる一同。

「お前たちが悪魔の・・・友達か？」

ギロリと睨まれる・・・怖い。

しょうですらビビっている中、こいつは違った。

「はい!! 悪魔の親友たちです!」

由貴は不死身だからか天然だからか堂々と言う。

まさに命知らずなバカを見据える閻魔。

「そつか・・・悪魔を頼んだぞ」

なぜか一言一言に重みがあり、背筋が知らぬ間にのびる感じである、
さすが閻魔と言われる大物だと感心するしょう達だった。

「悪魔」

「なに？」

「・・・修行、精進するのだぞ」

「・・・はい」

久しぶりに父に会えたからか、
悪魔は本当に嬉しそうに笑顔だった。

「良かったね、お父さんにあえて」
由貴は悪魔に言う。

「うん！そういえば、由貴の父さんは？」
少し詰まってしまう由貴。

「い、今は会えないんだ」

苦笑いをする由貴を見て悪魔は戸惑ってしまう。
しょう達も聞いていた、そして、

「でも俺らにはいつでも会えるだろ」

しょうが言った。

「私も、いつでも御そばにいますわ」

エリーも言った。

「おれだっていつでもイルゼ！」

「お、俺様も！」

池波や悪魔も、

「・・・うん！」

既に空には夕焼けが広がっていた。

日々10「こんな体育大会前編」(前書き)

時期が遅い？そうかしら？b y シャン

日々10「こんな体育大会前編」

本日、体育大会

爽やかに、仲間と汗を流し、ライバルたちと戦い、競い、己の限界を試し、

栄光を手にする、体育大会はまさに清きスポーツの大会である。

だが、由貴の学校はかなり違った。

「いいかお前ら！！負けんじゃねえぞ！！」

由貴の担任、不良先生こと三浦が叫ぶ。

別に彼は熱血教師ではない、

体育大会にはさらさら興味はない。

興味があるのはただ一つ、

優勝賞品 テスト免除、及び賞金100万

まあ、あれだ。

学校行事に賞金とは非常識であろう。

だが、残念ながらこの学校は体育大会をギャンブルと称し、どの組が勝つか賭けるといふ、ノンモラル学校である。

賞金はその集めた金から出しているのだ。

所詮コネで入った人間ばかり、

金は有り余るといっわけである。

で、テスト免除はそのまま、秋のテストを優勝クラスは免除されるのだ。

まあ普通の人間ならばおかしいと思うだろうが。

バカが揃いに揃っていた。

「よおーしー！がんばるぞー！」

由貴、赤組。

「なあ、おかしいよな」

しょう、赤組。

「かまわないわ、所詮遊びでしょ
ルリ、赤組。」

「かつヨーーーーー！！！」

池波、赤組。

シャン「ねえ、蓮、わくわくしない？」

シャン、黄組。

蓮「全然」

蓮、黄組。

「いいかお前たち！！勝たなかったらクロス！！」

早速この先生ヤバイよと三浦を見る生徒。

だが三浦はかまうことなく続ける。

「いいか！まずは・・・100m徒競争か、よし選手は誰だ？」

「私と池波君です」

学級委員長が答える。

「違う！他の組のだ！」

「え？なんで他の組を？」

「そいつらを走らせないように殺すためだ！！」

根本的に間違っていると思ったしよかった。

「それより学級委員長は足が速いし池波も速いから勝てると思いま
す」

しようが提案をする。

「よし、では信じよう」

100m徒競争。

「よゝい、パン！」

池波、余裕の男子一位。

学級委員長、惜しくも女子二位。

「負けてんじゃねえかああああ！！！！」
しょうの首を絞める三浦。

「ま、待つてください、それでも二位ですから」

「まあいい、取り敢えず学級委員長、クビ」

こいつひでえ、そう思った生徒たち。

「次は・・・パンくい競争か！これは俺に策がある！」

三浦は奇妙な薄笑いを浮かべながら言った。

パンくい競争。

「よゝい、パン！」

「ところで先生、策って何です？」

「ふっ、あのパンのうち一つはアンパン、その他は・・・」

「その他は？」

「からし&マスタード、わさび入りパンだ」

それやべえよと突っ込む生徒。

「しかもパンの生地には唐辛子が練ってある、俺も試食したが、人間の食うもんじゃないな」

「それじゃあ、分かっちゃいますよ？赤いから」

「あ」

あ、じゃねえよと思う生徒たち。

『おーっと、どうやらパンにかじりついた生徒がもがいている！どうしたのか！？』
実況がノリノリで言う。

ちなみにこのパンくい競争の選手は由貴だったため何とか一位。

「さすがだ富宝！！先生はお前を信じていたぞ！！」

《よかつたな、不死身で》
静かにそう思ったしよかった。

「次は・・・障害物競走か！これも俺が事前に仕掛けたわがある！」
最低な奴だと生徒は思った。

障害物競走。

「よーい、パン！」

まずは平均台。

『おーっと！ハプニング！赤組以外の平均台が接着剤でべたべただあ！！！』

「先生？」

「俺が独自で開発したくっ付くとなかなか取れない特殊接着剤だ」
《卑怯だなおい》

お次はアミ潜り。

『なんとという事だ！！赤組以外のアミははりがねの柵だ！！これは痛そうだ！！』

「先生」

「ちなみに切れ味抜群だ、俺も通ろうとしたがあまりの激痛に涙が出た」

《バカだ》

そして難関のフクロとび。ハ袋に両足を入れ前にジャンプして進む
競技」

『おや！？どうやら赤組以外は袋が小さくて足が入らないようだ！
』

「……」

「あれは俺がすり替えたのだ」
《……》

結果、堂々の一位。

「よし、次は借り物競争か！選手に言う！一番右のものを取れ！
またなにか卑怯なことでも思った生徒たち。

「よーい、パン！」

『さあ！選手たちは一体何を借りるのか！？』

青組「この中にベツカムはいませんか！！」

《いや、いないって》

黄組「夏目漱石！？聞いたことがあるような？」

《もう死んでるよ》

緑組「ここから1000m先の自動販売機のコカコーラ持ってる人
！！」

《地味に遠い！！》

赤組「くじら！！」

「ばかやる！！一番右のものを取れといただろ！！」
《失敗かよ》

白組「み、三浦先生？」

「ま、そんな事もあるつかと俺の名前を書いといた」

「え？どうしてです？」

由貴がのんきに聞く。

「もしも他の組だった場合は俺は逃げてゴールさせないためだ！
とことんセコイと思った生徒たち。」

結果、誰かが持参したくじらのぬいぐるみで赤組は一位。

ちなみに白組は三浦が必死に逃げて結局ゴールできなかった。

午後の部が続く。

日々10「こんな体育大会前編」(後書き)

お姉さま・・・by 蓮

日々11「こんな体育大会後編」

午後の部

「よし！今のところ黒組と10点差で一位か、午後で一気に点差をあけるぞ！」

三浦は俄然やる気である。

もはや止められないと悟る生徒。

「次は！・・・1500m走か、これは誰が走る？」

「はい、自分です」

「よし、お前帰っていいぞ」

「な！なぜでありますか！自分は今日のこの種目のために訓練を行い！」

「黙れ、家がイヤなら地獄に逝かすぞ」

「はい、帰ります」

《今度は何を考えているんだ》

「よゝい、パン！」

『さあ！1500m走が始まりました！おゝ！赤組が今のところトップです！選手は・・・アフリカからの留学生ウエオリル・ゴン君です！』

走っているのはどうみても中学生ではないアフリカ人。

『あ！今彼の経歴が来ました！オリンピックク5年連続長距離走の優勝者です！』

「ど、どうやって呼んだのです？」

ルリが三浦に聞く。

「ん？チャットでメル友になったから」

《卑怯を通り過ぎてすごいとしか言えない》

結果、一位、20年ぶりに学校記録が塗り替えられたそうだ。多分これからはもう記録塗りかえれねえよと思った生徒だった。

結局その後も、

玉入れでは赤以外の玉を鉛にすり替えたり。

騎馬戦では生徒に混じってプロレスラーを入れたり。

走り幅跳びは赤組の記録の単位をメートルからキロにかえたり。

そこまでするかと思う程の卑怯三昧で一位を独占し続けた三浦。

で、最後の競技、全員で町一周リレー。

これは由貴の住む町をリレーで1周するもの。

全員参加のため距離は相当。

これがこの学校の体育大会のメインである。

「先生、今度は何をやる気ですか？」

「しょうが呆れながらも聞く。

「いや、これはみんなでもやる競技だ、私は手出しをしない」

「え？」

「お前ら、精一杯がんばって来い」

先生！と生徒たちが感動の場面に入ろうとした時。

『え、今大会の特別ルールが入ります、最後の競技「全員で町一周リレー」ですが、配点が上昇します、一位には500点二位には300点三位以降は-100点です』

そして二走者から十四走者まで何の問題もなく一位。
だがさすがに後ろの組が追いかけてきた。

「ふっ、鷹世」

「なんですの？」

ルリが走りながら三浦に聞く。

「次の給水所では水を飲むなよ」

《また何かしてますわね》

給水所、

黒組「ん？バカめ、赤組は給水もせず進んだか、女はすぐ倒れる、
タイムロスを考えはやまったな」

逆転する気満々の黒組は学習能力もなく水を一気に飲みする。

ちなみに水の60%は睡眠薬が混ぜてある。

普通はドロドロで変に思うはずだが黒組は何も思わず一気に飲み。

案の定倒れて熟睡である。

三浦は死人が出るのはやばいと思い10分後救急車が来るように電
話をしておいた。

そしてまた十五走者から三十二走者まで無事一位。

ちなみにこの二十三人目の区間が一番きつい鬼の坂があるところだ
ある。

長い坂を走りきるのはだいぶ体に負担を与える。

さすがのしょうも半分行けば息が荒くなった。

「那鎧後もう少しだ！がんばれ！！」

なぜか全部走っているくせに元気な三浦。

ふと後ろを確認すると遠くに他の組の姿が見える。

「くそ、さすがに怪しく思っただけで睡眠薬入りの水は飲まなかったか」
当然だろと思っただけでしょう。

「フッフ、だが俺たちが頂上に着けば」
《何考えてんだ》

そして必死の甲斐あつて頂上到達。

「よし！那鎧、よくがんばった、後はこのボーリングの球を転がすだけだ」

「ぼ？ボーリングの球？」

「トラック三台を使って運んだんだ、苦勞したぜ」

そして外道にもボーリングの球を落として他の組の走者を蹴散らした。

「ストライクー！！」

喜ぶ三浦、呆然とするしよう。

「さあ！たすきを渡そう！」

こうして三十三走者からアンカーまでトップだった。

「フッフッフ、富宝、あとはゆっくりすればいい、優勝は決まったも同然だからな！」

「わ〜い、やった〜」

「優勝パーティーは和牛の名産地食べ放題がいいか？」

「高級すし屋がいいです！」

「それもいいなあ！」

歩く二人は気づかなかつた、黒組の陰謀でコースを表示する看板が逆を指していたことに。

そろそろゴールのはずがまだゴールできない事に気づいた三浦。

「おかしいな、ん？あの建物は学校と反対方向にあるものじゃ？」

「あれ？でも看板に沿ってきましたよ？」

「もしいや、罠か！？しまった！くそっ！！」

「ど、どうするんです！？」

「む、あれが使えるぞうだ」

黒組「へっ、今頃赤組は違う方向へ行ってるだろう、ざまあみる」
確実にゴールへ近づく黒組。

黒組「優勝パーティーは断然フランス料理だな」
のん気に歩いていると。

「ブローローーン!!!」

黒組「ん？バイクの音？」

「ひゃっほー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「盗んだバイクで走っちゃうー！ー！ー！」

三浦と由貴のバカコンビがバイクで黒組を追い越した。

黒組「じゅ、十五夜ごしごしや」

既に意味の分からない事を口走る黒組だった。

もっとも最低で最悪でド卑怯な方法で見事一位を取った赤組だったが、
教育委員会で問題になり来年度から賞品なしになった。

「なぜ今まで問題にならなかつた？」

「先生がバイク盗んじやつたから外部に漏れたんだって」
結局ダメな先生だなと思っただろうだった。

日々11「こんな体育大会後編」(後書き)

2回連続きついです。by作者
あっそ byしろう

日々12「こんなテスト勉強雪山編前編」(前書き)

復帰一作目だぜby作者

日々12「こんなテスト勉強雪山編前編」

歴史の授業

「つまり、新渡戸稲造は、国際連盟本部の事務局次長として活躍したわけだ、いいか？ここテストに出るぞ」

不良先生こと、三浦先生が黒板を叩いていった。
そこへ丁度よく鐘が鳴る。

「キーンコーンカーンコーン」

「じゃ、明日のテストがんばれよ」

そう言っ出て行く三浦先生。

教室はざわめき始めた。

「しょうくくくん」

「何だ？由貴？」

机にだれている由貴。

「テスト明日だけどく大丈夫く？」

「取りあえず語尾をのばして喋るな」

「アハハハハ！テスト？そんなのしつたこつちやナイゼ」

池波が横から口を挟む。

「まあお前ほど諦めがよけりや確かに問題ないな」

「でもなあ、エリーさんにもう赤点は取らないようにって言われてるしな」

「ふふふ、由貴困っているようね」

ルリがここぞとばかりに話しに入ってきた。

「明日のテストを万全にするためにも！今日はみんなで勉強合宿よ！」

「なぜそうなる？」

「なあ・・・ここどこだ？」

「我が鷹世財閥の所有地よ」

「いや、それは見れば分かる、地名を聞いているんだ」

「さあ？・・・ルリ山でいいんじゃない？」

「自分の名前付けやがった・・・で、なぜ車じゃない？」

「だめねえ、いくら金持ちだからって、これからは地球環境の事を考えるのよ！省エネの為に車の排出ガスは押さえなきゃ」

「だからって・・・ヘリで移動かよ」

今、由貴たちを乗せたヘリコプターはエレベスト山を通過中だった。

「なに言ってるの、ヘリは二酸化炭素出さないのよ」

「いや、出すから、バリバリ出すから」

「え！？ヘリは二酸化炭素を出すのですか!？」

シヤンが真面目に驚いていた。

「お姉さま、恥ずかしいので喋らないでください」

蓮が落ち着いて答える。

「つーか、エレベストを買ってどんな神経してんだよ」

「エレベストではなくルリと今度から呼びなさい」

「いや、誰も呼ばないから、絶対ここはエレベストだから」

そんな話をしていたら、ヘリのパイロットがもうすぐつくと教えてくれた。

吹雪の中に聳え立つ城。

その屋上にヘリは向かう。通信をしながら何か喋っている。

すると、降りようとしていた場所が真つ二つに開いた。

大きな穴の中にヘリは見事に入っていた。

「おいおい、ここはどっかの秘密基地かよ」

「そうよ！万点取り隊の秘密基地よ！」

ルリが堂々と言った。

「たつく、ん？由貴と池波は？」

「ああ、由貴なら寝てたけど・・・池波君は確か一緒にいたはずなのに？」

蓮がヘリコプターの後ろ部分へ向かう。

備え付けのベットをめぐってみた。

・・・誰もいない。

「おかしいわね、確かにこここのベットに入っていたはずなのに？」

ふと周りを見渡すと、非常ドアが開いていた。

「・・・うそ」

「え？由貴と池波がいない？」

「多分・・・落ちたわ」

「へりから？」

「まあまあ、室内カメラを設置していたので、これさえ見ればわかりますよ」

へりのパイロットがのん気にカメラのメモリーカードを取り出した。そしてすぐチェックする。

『イヤだー！！！！ベンキョウなんて誰がするかああ！！！！』

池波が叫ぶ映像が流れた。

『逃げねば・・・ニゲネバ・・・う~~~~ん』

そのとき由貴がベットから起き上がった。

『ん~~~~、しえろ~~~~、トイレどこ？』

『ハイ？多分あれだよ』

そして指差したのは非常ドア、

『ありがと〜』

目を擦りながらドアを開ける由貴、

『ドンッ！！！！』

開いた瞬間由貴は外へ吸い込まれた。

「ん？うおおおおオオオオ？？？？？」
巻き込まれて放り出された池波、
そして二人は消えた……。

「なんじゃこりゃああああ！！！！」
へりのパイロットが叫んだ。

まあ普通の人間なら驚くだろう。

「なんてこった！救急隊！自衛隊！いや！地元の国の軍隊を呼べ！
！早く！！」

慌てまくるパイロットをよそに4人は落ち着いていた。

「まあ、由貴は不死身だから大丈夫ね」

「そうですね、由貴は取りあえず無事ですね」

「由貴は無事ですけど……池波君は？」

「池波も大丈夫だろ、何とかなるって」

取りあえず冷静だった。

吹雪の中の2人。

「さ、寒いね〜」

「これ、寒い通り越してルヨ」

そりゃあ厚着と特殊防寒着があっても凍死するこの山で長袖と上着
にジーンズでは寒さを感じる前に死神がやってくる。

「ど、どうしよう」

「そうだな、このままだと死ぬネ」

「いや、僕は死なないけど、テストが受けれなくて」

「ここまで来てテストカイ！！もっと大事なものがアルダロ！！」
「なに？」

「……さあ？なんたる、由貴死なないし……」
一瞬素になつた池波だつた。

「でもあれだな、行けどもイケドモずつと白い雪ばかりでつまらないナ」

とうとう極限の環境に慣れた池波。

「じゃあさあ、時間もつたいないからテスト勉強しよう」

「勉強カア、仕方ナイ」

「まずは社会から、歴史の問題、明治時代に最年少で留学したといわれるのは？」

「織田信長」

「いや、彼はとつくに死んでるから、それに生きてたら最年少じゃないから、最年長だから」

「知らないの力？信長天才なんだゾ？」

「いや、戦の天才かもしれないけど時代が違うから、正解は……あれ？誰だっけ？」

「源義経」

「絶対違う、時代さかのぼってんじゃん！」

「知らないの力？義経は生き延びて中国行つたらしいゾ」

「例えそうだとしても明治までに生きてるわけないから、それに留学したのは女の人ははずだよ！」

「ああ、わかつた」

「え？だれだれ？」

「小野妹子」

「完璧違うから、女の人ばい名前だけど男だから、しかもまた更に時代さかのぼってるし」

「じゃ津田梅子」

「それもちが……いや、そうだ、津田梅子だ」

「マジカ！、日本人最後の魔女といわれた津田梅子カ！」

「いや、魔女ではなかつたと思う」

「じゃ、次オレナ、1989年に冷戦終結とともにドイツではある壁が崩壊シタ、さあ何の壁？」

「石の壁」

「いや、ソウダケドサ、もっと、こう、名前だよ名前！」

「戦争という残虐で非情な罪無き人々を地獄へ叩き込んだ行為による産物の壁」

「おも！！重いよそのセリフ！しかも違うよ！あってるけどチガウ！！！」

「憎悪しか抱けない壁」

「地名だつてバ！地名ダヨ！」

「ん〜、ドイツ・・・ああ、ベルリン？」

「やっと当たつタヨ」

珍しくツツコミのしえろうだった。

続く

日々13 「こんなテスト勉強雪山編後編」

城の中では相変わらずルリの使用人達が慌てふためいていた。それと打って変わり勉強をしているしよっ達。

「い、いいんでしょうか？勉強なんかしていて？」

蓮が口を開く。

「仕方ないだろ、俺たちが外出たって死ぬだけだぞ」

しよっ達が数学の方程式を解きながら言った。

「そっよ蓮、心配しなくても由貴としえろっは帰ってくるわよ」

「お姉さま」

珍しく正常な姉に笑顔をこぼす蓮。

「ねえ蓮」

「なんですか？お姉さま？」

しかし、蓮の笑顔も次の言葉で凍りついた。

「因数分解って、何ですか？」

いくら天然系勘違いお嬢様だからといっても勉強がここまで遅れていれば手の施しようがない。蓮は涙を隠しながら因数分解を説明した。

「因数分解分らないって、大丈夫かよシヤンは」
しよっがあきれながら言う。

「そっ言うあなたも勉強はできるほうなの？」

ルリがイタズラっぽい笑みで聞いてきた。

「90点以下の点数を取ったことはない」
あっさり返すしよっ。

「くっ、そっだったわね、見た目に寄らず頭いいものねあなた」

「そう言うお前は見た目によらず馬鹿だもんな」

「ば！バカとはなによ！ちよつと国語と数学と理科と社会が苦手なだけよ！」

「ちよつと苦手なら30点以下はとらないぜ？」

「・・・くつ、覚えてらっしゃい、夕食は劇薬を忍ばせて殺して差し上げますわ」

「怖いなおい」

一方、由貴達は。

「葉っぱが酸素を出してデンプンを作る事をなんという？」

「ハハハハハ、わっかんネ」

「正解は光合成でした」
結構楽しそうにしていた。

「遊園地の入場料が、大人3人、子供5人で1900円、大人2人、子供4人で1400円、サア！大人一人と子供一人の料金はそれぞれいくら！？」

「う~~~~ん、だめ、わかんない」

「オレもダ」

「それじゃあ勉強になんないよ」

そんな風に笑っていると・・・二人は気づかないが後ろからある陰が近づいていた。

巨大な2メートルはありそうな人間の形をした何か、その何かはゆっくり2人に近づいてきた。

「・・・ナア、由貴・・・」

「どうしたの？」

「う、後ろに何かいるような気がする」

「何がいるの？」

「イヤ！わからないよ！だからいそうな気がするってイツテンジャ
ン！」

「いないよそんなの〜」

振り返る由貴。

そして走って近づいてくる謎の大きな人間。

「ゆ、ゆ、ゆゆゆき」

「ア？雪ならそこらじゅうにアルヨ」

「ゆきゆきゆきゆきゆき」

「ン？由貴はお前ダロ？どうしたんだヨ？」

「雪男おおおおお！！！！！！」

「エイテイ！？」 雪山に住む猿人こと

池波も振り返って雪男らしき影を見る。

「ニゲロオオオオ！！！！」

叫ぶ池波、既に走っていた由貴。

追ってくる雪男らしき謎の生物。

まさか由貴達がそんな目にあっているとは思ってもいないしょう達
であった。

走る由貴と池波。

「ハアハア・・・ねえ！！・・・なんで逃げてるの！！」

「何イツテンだ！ハアハア・・・え、エイテイに捕まると・・・ハ
アハア！」

「つ、捕まるとどうなるの？」

「腕と足をもがれて非常食にされて生き地獄を味わう」

「いやだあああ！！！！ふえええ〜」

泣き始める由貴。

池波は走りながらも言葉を続けた。

「だが！エイテイを倒す作戦ガアル！」

「な、なに？」

「取りあえず進めばワカル!!」

走っていると、樹木が生茂る林の中に入った。

「ココダ！作戦そのイチ！木で攻撃!!」

そう言っていると池波は恐るべき力で木をなぎ倒していった。

すぐに雪男が追いついた。

「シネエエエエエエエエ!!!」

巨大な大木を投げる、だが雪男は軽い身のこなしでジャンプして避けた。

「コシヤクナア嗚呼嗚呼!!!」

だがそれが池波のスイッチを押してしまった。

次から次へと木を投げる池波。

さすがの雪男も避けきれず5本木が体に激突して吹っ飛んだ。

「今だぁアアア!!!」

走り出す2人。

その後も追いかけてこは続くかと思われたが思いのほか雪男はあっさりあきらめた。

もう追いかけてこない。

「た、助かったぜ」

「ん？あのお城なんだろう？」

なんと二人は自力でルリの城までやってきていた。

「由貴~~~~!!、心配してたよ！大丈夫だった!？」

ルリが白々しく暖炉の前で温まる由貴に抱きついた。

「まあお前の事だから心配するほどじゃなかったがな」

しよっやシャン達も由貴の様子を見に来た。

「よかったわ、由貴の事が心配で泣いてたのよ蓮ったら」

「え!？お、お姉さま!？なぜそんな嘘を!？」

「ははは、ありがと！僕は大丈夫だよ」

温かく笑う中で、独りだけいじけている奴がいた。

「な、ナンデオレは誰にも心配されてナインダヨ……ウウ」
真っ白になっている池波。

「わりいわりい、冗談だよ」

「池波の事もそれなりに心配してたわよ」

「そうですね、それなりに」

「それなりって何だヨ！オレはそんな価値しかないの力！」

「まあまあ、ちゃんとしてましたから心配」

納得のいかない池波であった。

そこヘルリの執事が部屋に入ってきた。

「ルリ様、お友達が見つかって本当によかったですね、先程捜索隊から緊急の情報が入りまして、雪男が現れたそうです」

「まあそうなの？」

「オウ！雪男なら俺らも会ったゾ！ナア由貴！」

「うん！」

「左様でしたか、何でも巨大な丸太を投げてきたらしく、現地の捜査員が怪我をしたそうなので」

「本当か？危なかったなお前ら」

しよすが言葉をかけると2人も頷いた。

だが、その雪男というのが池波の事であり、由貴達が見た雪男は現地の捜査員であるというのは、誰も気づかないようだ。

「さ、テスト勉強するか」

「エ！勉強やだあアアア嗚呼！！」

「うるせえよお前は！」

日々14「こんな殺し屋」(前書き)

新キャラ、殺し屋の登場です。

日々14「こんな殺し屋」

オレはプロの殺し屋だ。

ゴゴゴ13やシテ〇〇ハンターと肩を並べるほどの腕前だ。

しかも扱えるのは銃だけじゃねえ、あらゆる暗殺武術を会得してきた。

そして、オレは正義の殺し屋でもある。

善人や弱い者を殺すつもりは無い。悪人のみをターゲットにしてきた。

だから俺の依頼には助けを求める弱き者たちの思いが詰まっている。俺はその思いを背負って血みどろの世界をこれからも歩いていく。

ビルの屋上でたたずむ男。

彼の名は「守藤狩也」すとうかりや 26歳、殺し屋歴13年の自称「ブラックジヤステイス」

中学生の時に殺し屋の師匠に弟子入りし今に至る。

常にサングラスを外さないナンパ男である。

「フツ、この街も、上辺だけは美しく平和なものだ」

そう言いながら下の人通りを眺める狩也。

すると一人の女性に目が止まった。

スタイル抜群のサングラスをかけた緑色のポニーテールの女性。

エリーである。

「……きれい、可愛い、美しい、これは！……一目惚れか！この心の中にあふれる思い！オレは！……恋をした！」

どうでもいい事を口走りながら屋上を出る狩也。

エリーを追いかけるつもりである。

ビルを出てすぐ走り、10メートル先にエリーを見つけた狩也。

「フ、恋をしたならその1、知り合いになれ」

いきなり謎のレスンを始める狩也。

どうやらエリーに声をかけるようだ。

「かーのじよ お茶しない？」

まさにナンパ。

そんなもので引つかかるわけが無い。

しかも後ろから呼んでいるためエリーは気づかない。

「ねー、かーのじよ！」

エリーの肩に手をかける狩也。

「ハッ！」

するとエリーが狩也の手を掴み背負い投げをした。

「あれ？」

吹っ飛ぶ狩也。そこから狩也の意識がとんだ。

ふと気がつくると狩也はソファーに寝かされていた。

「気がつきましたか？」

そしてエリーがすぐそばにいる。

「すみませんでした、後ろからさわられてつい、護身術を」

突っ込むべき部分があるが狩也は一切聞こえなかった。

サングラスを取ったエリーの顔をポカンと見ている。

エリーの美しさに更に惹かれた様だ。

「あのく、大丈夫でしょうか？」

ハッと我にかえる狩也、そして、

「ど、どなたですか？僕は・・・誰ですか？」

記憶喪失のまねをした。

「え！？そ、そんな、記憶喪失に！？・・・どうしましょ？」

「あ、あなたは誰ですか？」

「え？・・・私は先程あなたと会ったばかりで」

「名前は何ですか？」

「え？・・・エリー・笹音です」

「住所は？」

「え？な、なぜそんな事を？」

「何か思い出しそうなんです！」

言葉巧みに情報を得る狩也。

そこへ悪魔と由貴が帰ってきた。

「ただいま」

「今帰ったぞ！」

2人がリビングに入ると、エリーとグラスンをかけた男。

「あれ？富宝家からの使い？」

由貴が狩也を見て言う。

「いえ、その、実は記憶喪失の方で」

そしてここまでの経緯を話すエリー。

「へ、大変だね」

「どうしましょうか？」

「それなら俺に任せな！」

悪魔が自信満々で答える。

「記憶を戻すなんて簡単簡単」

狩也は悪魔をエリーのコスプレ好きな弟だと勘違いしていた。

故に記憶を戻すなどできるわけが無い、

このまま記憶喪失を装いここに居座ろう、そう考えていた狩也だが、

悪魔は全て見抜いていた。

「いでよ！大鎌！」

か

サングラスを光らせバイクに乗っている狩也。

「エリー・笹音、・・・いつかオレのものに」

頭の中がエリーでいっぱいなの狩也。

信号が赤なのに気づかなかったため次の瞬間トラックにはねられた。

南無。

日々14「こんな殺し屋」(後書き)

いや、死んでねえよ。bV狩也

日々15「こんなお花見」

桜の花吹雪が見ごろの4月、

富宝家の所有地のお花見専用の山も桜で満開である。

「しょうくん！こつちすごいきれいだよ！！」

由貴が走りながら大きな桜の木を見上げて言う。

「ほお、立派じゃねえか」

しょうも遅れながら由貴に追いつき満開の桜を見る。

「こんなところに来て何するんだよ？花は見たからもう帰ろうぜ？」

「あら、悪魔様、今日はお花見と違って、日本の伝統行事を行うのです、春の訪れである桜の開花にあわせて、桜の下で家族や友人とお食事をするのですよ」

「へへ、外でメシを食べるのか」

悪魔もエリーも由貴の後を歩きながら話している。

「やはり富宝家の所有地は格別ね、桜の手入れが行き届いているわ」

「着眼点がずれてますよルリさん、桜を見に来たのですからもっと

自然について感想を言ってください」

蓮が呆れながら言う。

「去年はフランスで春を過ごしましたから桜を見るのは久しぶりですわ、一本枝を折っていいこうかしら？」

「お姉さま、そんなはしたない事は止めてください、それに、大切な自然なんですから粗末に扱ってはいけません」

「相変わらず堅いわね蓮は、私の妹でありながらどうしてこうも厳しいのかしら」

「そうよ蓮、少しはシャンを見習ってバカになりなさい」

「そうそう・・・え？ルリ、今なんて言いました？」

「え？ですから、シャンお姉様のように優雅な気品を持って」

「ああ、そうですね、そうですね、蓮、あなたも私を見習って」

二人が蓮のいた場所に目を向けると、

既に蓮は先へ行ってしまった。

「ま、待つて蓮、私が悪かったから」

慌てて追いかけるシャン、

「全く、仲のいい兄弟ね」

ルリが微笑みながら言っていると、後ろから池波が走ってきた。

「おいていくなんてツレナイじゃナイカ」

「池波君、あなた会う度に片言が増えていく気がするけど？」

「キノセイキノセイ」

「せめて片言は語尾だけにして、聞き取りづらいわ」

「わ、わかりました」

二人も由貴達の後を追うのであった。

「大きな桜の木」

由貴が無邪気に見上げながら言った。

「ほんとだな、どれぐらいの樹齢だろう？」

しようがそれとなく言う。

「ジュレイ？それフランス語？」

「あら？そんなフランス語聞いたことありませんね？」

「お姉さま、樹齢ですよ」

「木の表面を傷付けると出てきて昆虫のエサとなる液のことでしょう？」

「それは樹液ダゼ？」

「樹齢つてのは木の年齢のことだ！」

しようがイライラしながら説明をする。

「そうですね、この木は樹齢500年程と聞きました」

「すげー、人間界でもそれだけ生きる奴っているんだな」

悪魔がエリーの話聞きながら感心する。

「さあ、早速ご飯にしましょう」

エリーが言つとどこからか出てきたサングラスにスーツの男達が大

きなテーブルとイスをセットして去っていった。

「・・・どっから沸いてきた」
「しょうが静かにツツコム。」

「ほら、みんなイスについて！今日は私達がお料理して来ました」
「そう言つとルリとシャンと蓮が持っていたリュックから重箱を取り出す。」

「まずはトツプバター鷹世ルリ！一生懸命作りました」
ルリが蓋を取つて作つた料理を並べる。

「これは特製『フォアグラのパスタ トリユフ添え』、こっちは『サーモンとキャビア』そして『ツバメの巣のスープ』、更に『ビーフステーキ ルリアレンジソースがけ』！さあ、召し上がれ！」

（絶対これはシェフに頼んで作つてもらつたものだ）
「しょうが心の中でそう呟く。」

「ねえルリ、これシェフに頼んでもらつたダロ？」
「空気を読まずに率直に言つてしまった池波。」

「ダンッ！」

池波の目の前にナイフが突き刺さる。

「だ・ま・れ」

目が光っているルリ。

「いただきます」

血の気の引いた顔で笑いながら食べる池波だった。

「次は私ですわね、シャンの手作りお料理！今日のテーマは「和」
ですわ」

笑顔で料理を並べるシャン。

「こちらは『おはぎ』という日本伝統の和菓子で、こっちはお餅で作つた『ワラベ』・・・だと思ひます、そして『御饅頭』私の手作りです」

箱の中には正直得体の知れない物体が詰められている。

（う、うそだろ！？たかがお菓子作りでここまで失敗するか！？）

しょうが心の中で叫ぶ。

(あ、ありえないわ、本当に自分で作ったの!?)
ルリがズレた見方をする。

(・・・ルリのはおいしかったけど、シャンのは不味そうだ・・・)
悪魔が静かに呟く、

(・・・今度お菓子作りの教室でも開きましょう)
エリーがそう心に決める。

(・・・お姉さま・・・)
蓮は心の中で泣いた。

「無理、こんなの食べれるわけないダロ!」
一人ぶつちやけるバカ。

「えゝ、い、一生懸命、がんばったのに」
今にも泣きそうなシャン、

瞬時にしよう達は目で合図しながら池波を睨みつける。
「ばかやろう!折角シャンが一生懸命作ったんだ!ちゃんと食べる

池波!」

「そうよ!食べれないなんて失礼よ!しっかりいただきなさい!」
「ほら!口開ける!」

「レディーに失礼な方は許しません!」
4人が協力し合って池波の口にありつたけのシャンの料理を入れる。

「ぐああがおいぐほがが!」
そして無理やり飲み込ませる。

「どっ?」
シャンが涙を拭きながら訊く。

「おいしいよ!」
池波の代わりに由貴が最高の笑顔で答える。

池波はそのまま失神した。

「さて、最後は私ですね、私は普通にちらし寿司を作ってきました」
蓮が色とりどりな美しいちらし寿司を並べる。

「おお！おいしそう！」

悪魔が喜んで一口食べる。

周りもその美味しそうな見栄えに喜んで一口食べる。

（ぐおっ！！）

（なにつ！！）

（うそ！！）

（そんなっ！！）

（くはっ！！）

次々と倒れる、そして、悠然と食べていられたのは由貴一人だった。

「おいしいよ蓮！」

「・・・もつと勉強します・・・」

桜の花びらがきれいに舞っていた。

日々16「こんな池波恋物語前編」(前書き)

今回はなんと池波が主役です！by作者

日々16「こんな池波恋物語前編」

私って、何で生きているのかな？

何のために生きているのかな？

私って、生きてて良いのかな？

「ねえ見て、転校生の佐原さん、今日も一人でお弁当食べてるわ」

「本当、もう一ヶ月もたつのに、全然馴染まないもんね」

「ああゆうのがいると、正直クラスの雰囲気って悪くなるよね、あーやだよだ」

……ごめんなさい

佐原裕未

由貴の学校に転向してきた一人の少女。

性格は引っ込み思案で暗い子である。

そしていつも心の中で謝るのが癖なのである。

私、なんで生きてるのかな？

いつも自分に問いかける質問、

だが、結局その答えは見つからない。

「掃除係りはいつものように佐原さんで良いと思います」

学級の係り決め、裕未は転向してからずっと面倒な掃除係りを押し付けられてきた。

「またか？それじゃあ佐原だけ不公平だろ」

「先生、佐原は掃除で良いんですよ、な、佐原？」

少し顔の良い男子が裕未に笑いかけてそう言う。

「あ……うん」

笑いかけてくれたのが嬉しくて、つい頷いてしまう。

なんだか、頼りにされていると思えるから。

「じゃあ、もう一人は？」

「池波君しかいませんよ。」

「おいおい、池波は今日休みだろ？本人の了解も取らないで勝手に決めてはいかん！」

「いいじゃないですか、休む方が悪いんだもん！」

結局、掃除係りは、裕未と池波になった。

次の日の放課後

「・・・八？」

「いや、だからお前は今日から掃除係りだから」

「マジかよ！今日はしょうと帰る約束があるのにヨウ！」

「別にいいじゃねえかよ、佐原に全部やらせりゃいいじゃん」

「・・・ナニ？」

「だって、あいつが全部やってくれるんだよ、先生にも言わないからさ、サボっちゃまえば？」

教室

今日も一人だな・・・

裕未は一人でいつものように掃除をしていた。

別に慣れているからどうとも思わない、ただ、寂しいとは思っていた。

ふと、廊下から声が聞こえた。

「ねえ、あんたさあ、佐原さんに妙に優しいよね、昨日の係り決めで微笑んじやってさ」

「ああ、あれか？バーカ、優しくしてるつもりはねえよ、こっちが笑えばなんでも言う事聞いてくれるからよ、そうだな、今度金を持つてくるように命令してみるか」

「あ！いいなあ！お金手に入ったらアイスおごってよ」

・・・そうだったんだ、利用してた・・・だけか

まあ、そつだよな、頼りにしてくれてる訳、ないよね。
薄々気づいていたが、認めたくなかった事実、
結局、彼女は涙を堪える事しかできなかった。

・・・もう、いやだな

「ヘーイ！遅れてごめんね、ちょっと友達にさき帰るように行つてたからサ、ゴメンゴメン！」

突如教室のドアが開いて池波がハイテンションに入ってきた。
いきなりの登場に驚いた裕未は少し呆然とした。

「・・・アレ？・・・も、申し訳ゴザイマセンデシタ！」

しかし池波は裕未の顔を見ると、しまった、という顔をして土下座をした。

「ええええ？？いや、その？え？な、なんですか？」

いきなりの登場に加え土下座までされて慌てまくる裕未、
すると、池波は顔を上げて率直に言った。

「いや、な、泣いているから、怒ってるのかな？・・・と思っテ」

その言葉で裕未は更に赤くなって目を擦る、

「え？別に？な、泣いてなんか」

「いやな事でもありませんか？」

優しい池波の言葉に、裕未はなんだか変な気分になってきた。

「だ、ただ、大丈夫です！・・・ご、ごめんなさい」

「イヤイヤ、謝るのはこっちです、すみません」

「え、いや、その、あの」

「サ、掃除しますか」

平然としている池波は掃除に取り掛かった。

裕未も顔を赤くしながらも、掃除の続きをした。

「佐原サン」

「は！はい！？」

いきなり呼ばれて緊張している裕未、
だが気にせず池波は言葉を続けた。

「下の名前ってナンデスカ？」

「ゆ、裕未です」

「そうなんですか、ではユミって呼んでイイですか！？」

「え？いや、佐原でいいです」

「わかりました、ではユミって事で」

「え？いや、ですから佐原って呼んで」

「ユミは、好きな人イル？」

「・・・はい？・・・え？な、何質問しているんですか！？」

「イル？イナイ？」

「い、いません」

「そっか、俺はいるぜ」

「そ、そうなんですか」

「誰かって質問は禁止だぜ」

「別に聞きたくありません」

その台詞を言った時、はつと裕未は気づいた顔をして言った。

「ご、ごめんなさい、生意気でした！」

「エ？なにが？」

「いえ、その、生意気な台詞を言って」

「別に気にするなつて、ユミは臆病すぎるぜ？」

「ご、ごめんなさい」

「ダメダメ、ごめんなさいが口癖みたいだぞ？リラックスリラックス
クス」

「え？いや、急に言われても・・・」

なんだから、転校してから、こんなに話したのは初めてだと、
裕未は思っていた。

それから、毎日の放課後には池波と掃除をした。
その度に話をして、仲良くなっていた。

「池波君って、本当に面白いね」

「ユミも最近は自然に話せてるぜ、いつもより笑えてるし」

「えへへ、池波君のお陰だね、ありがとう」

彼はいつも笑った顔をしている、

キツネ目なのだからかもしれないが、笑っている、
だから、私も笑ってられる。

やっと、私の生きる意味が見つけた気がした。

「・・・え？お金？」

「そうなんだよ佐原、5千円俺に貸してくれよ」

いつだったか、廊下でお金を巻き上げると話していた男子が、言い寄ってきた。

「な、お願い！」

微笑んでくれる男子だが、今はもうなびかない。

池波と会う前の私だったら、お金を出していたと思う。

「・・・ごめん、私今お金持ってないの、本当にごめんなさい」

さすがに嫌だとは言わなかったが、相手は驚いたようだ。

「オウ！おはよーユミー！」

「おはよう、池波君！」

私が席を外して池波君の方に行くと、その男子は別の方へ行ってしまった。

「・・・誰だい？アイツ？」

「ん？べつに、お金貸してって言いに来たの、もちろん、断ったけどね」

「そうか・・・それよりヨウ！今日俺の友達の家でパーティーなんだ！ぜひ来てくれヨウ！」

「ほんとう？いいの？」

「モチロン！当然ダロ！」

「うん、じゃ！絶対行くね！」

パーティー、楽しみだな！

・・・なんで、こうなっちゃうのかな？

体育館に呼び出されて、なぜか殴られて蹴られた。

顔を見ると、あのお金を貸してと言ってきた男子とその仲間のように。

「ったく、大人しく金出せば良いのによ、うぜえんだよ」

・・・私、やっぱり、幸せになれないのかな？

続く

日々17「こんな池波恋物語後編」

「おい、いくら持つてる？」

カバンはもう荒らされて中身をぶちまけられていた。

財布がないことがわかった男子は早く出すようにせかす。

「も、持ってないです」

本当だった、財布は家に忘れてきてしまった。

だが相手は聞く耳を持っていない、

「うそついてんじゃねえよ！」

お腹を蹴られる、痛い、苦しい、涙が出る。

「おい、服を脱がせろ」

絶望的な台詞が聞こえた。

「そ、そんな！」

「出さない方が悪いだろ？」

どっちが！・・・その台詞さえ、言う事ができなかった。

何人かの男子の手が伸びてくる、

「いや！！やめてよ！！！」

手を押さえつけられる、

もう、私ダメなんだ・・・死にたい。

「い、いけな・・・み、くん」

何でだろう、最後に、池波君を呼んでどうするのよ私、

でも、なんだか、池波君が、助けてくれるような気がした。

私の寂しい学校生活を、明るくしてくれたのは池波君だった。

私に初めて本当の笑顔に向けてくれたのは池波君だった。

笑えなかった私に、笑顔をくれたのは、池波君だった。

生きる勇気をくれたのは、池波君だった。

「おい、なにしてる」

その声は、よく知っている声だった。

「い、池波!？」

「何してんだ後藤?」

口調がいつもと違う、怒っている口調だ。

「お前、殺されたいのか?」

雰囲気すら変わるその台詞は、私に乗っかっていた男子全員を退かすには十分だった。

「……大丈夫かユミ?」

「……い、池波君」

「ちよつと待っててね」

脱がされた制服の上着を拾ってあげる池波、

そして男子たちを振り返る。

「……死刑」

初めて池波君の怒るところを見た。

そして人を殴るところもはじめてみた。

止めようと思ったけど、それは一瞬で終わってしまった。

「まったく、破廉恥な変態ドモダゼ」

口調がいつもの調子になった。

「……ごめん、オレ本来来るの遅いみたいだな」

笑ってくれる池波君、

そして、私もやっと笑えるようになった。

「ありがとう」

足がすくんで立てない、そう言ったら池波はおぶってやると言った。

「じゃ、このままパーティーへ行くか」

「う、うん」

ゆっくり歩いてくれる池波君、

私はなんとなく聞いてみた。

「どうして私が捕まっているのわかったの？」

「掃除に来なかったから」

「あ、そっか」

「……ねえ」

「ン？」

「……なんで私にそんなに優しいの？」

「……ハイ？」

「私なんて、根暗で、クラスの異端児で、一緒にいても楽しくないでしょ？」

「……え？……いや、その」

「なんで、私に振り向いてくれたの？」

「なんだか言いにくそうな池波君、
そっか、池波君は『優しいから声かけただけ』って言えないんだき
つと。」

「……本当、優しいね、池波君は」

「え？……アノ？勘違いしてませんか？」

「え？……どこが？」

「真っ赤になる池波、だが、裕未は全く気づいてないようだ。」

「……ゆ、ゆみはさ、好きな人、いないんだよ……ね？」

「え!?!…いや、そ、そんな何でまたいきなり!?!」

「……オレは好きな人いるって、言ったよな」

「う、うん」

「その好きな子はさ……まあ、おとなしい子なんだヨ」

「うんうん」

「それで、いつも寂しそうな顔をしてるんだヨ」

「うんうん」

「……でも、話しかけたら、やっぱりかわいい笑顔を返してくれるんだヨ」

「ふむふむ」

「それでいて……すっげー鈍感」

「ふむふむ」

「さて、オレの好きな人は誰でしょう」

「え、そんなのわからないよ」

笑って答える裕未、池波は大きな溜め息をつく。

「え？どうしたの？」

「オレの好きな人が鈍感すぎて困ってるの！」

「・・・・・・・・え？」

池波の告白に真っ赤になる裕未。

「え？・・・え？」

「最初は、始めてみた時一目惚れ、そして、ずっと見ていたのに気づいてもらえず、やっとチャンスが来た時、初めて笑顔を見て、もっと好きになった」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・オレの好きな人は、笑顔がかわいいのに、引っ込み思案な佐原裕未、あなたです」

「・・・・・・・・」

顔が赤いまま、裕未は固まってしまふ。

ただ、裕未は一言だけ、言いたい事があった。

せめて気絶する前に言いたい事。

「わ、わたしも！」

池波君が、大好きです！

「ん？おう来たか池波」

「アア、シヨウカ、イマキタゼ」

「どうした？かたことが増えまくってるし顔赤いぞ？」

「……は、初めまして」

池波がおぶっている少女に気づくしよう。

「お、佐原さんじゃん」

「え？し、知ってるんですか？」

「おう、池波が大抵騒いでる時は佐原さんの話題だからな」

「ハハハ、殺すぞしよう」

「……おやく？……二人とも顔赤いな」

ニヤニヤするしよう、

「イイから入れてくれ、ユミは疲れているんだヨ！」

「はいはい」

由貴のマンションの部屋に入る。

そこではいつものメンバーが顔をそろえていた。

「ああ！裕未ちゃん？久しぶり〜！」

「あ、由貴ちゃん！久しぶり！」

「・・・エ？」

「な〜んだ、やっぱりしえろうが言ってたの裕未ちゃんじゃん！」

「池波君由貴ちゃんと知り合いだったんだ〜」

なぜか小学校の時の友達だった二人、

「そ、ソウダッタノカ・・・ま、仲間が増えて結果オーライってことで」

一人で笑う池波、

裕未は明るく笑っていた。

「やっぱ、笑顔が一番だな」

本当は、オレが君から笑顔をもらっていたんだぜ？

池波は静かにそう心で呟いていた。

日々17「こんな池波恋物語後編」 (後書き)

とりあえず、キャラ増えたな。byしろう

日々18「こんな幽霊」(前書き)

またまた新キャラ登場！

日々18「こんな幽霊」

「そろそろ暑くなってくるね」

由貴がマンシヨンでそう言いながら宿題をしている。

「そうですね、今年の夏は久しぶりに日本で過ごせますから楽しみですわ」

シヤンが由貴のノートの答えを見ながら言う。

「・・・お姉さま、学年が違うので由貴の答え写しても意味ありませんよ」

蓮が静かにそう言う。

「それにしても、ルリと裕未遅いな、アイス買いに行ってからもう30分も経ったぞ？」

「ちよつと見てくるヨ」

しよの疑問に池波はすぐ反応して外へ出ようとする、だが、ドアを開けた瞬間勢いよくドアがひらいた。

「ただいま戻りました」

「ゴン!!!」

ドアは内開きだ、案の定ドアは池波の頭にぶつかる。

「え」?

倒れる池波、固まる裕未、そして後ろから覗くルリ。

「ダツサイわねしよろうも」

「本当ごめんさしい、大丈夫ですか？」

氷で頭を冷やしてあげる裕未、そしてなんだか喜んでいる池波。

「イイよイイよ、気にするなッテ」

デレデレする池波に不審な視線を送るしよ達。

「にしても、もうすぐ暑くなるくせに、梅雨の時期が来るからな」
しよが言った何気ないセリフに、由貴はふと止まる。

「……………」

「ん？どうかしたのか由貴？」

悪魔が由貴の様子を見て気遣う。

「え？……いや、ちよつと思いついてね」

「ん？何をですか？」

蓮がそれとなく聞く。

「うん、一昨年の梅雨の時期に幽霊と遭ったものだから」

さらりと言う由貴、反応に困る周り。

「……なんだ？冗談か？」

「本当だよしよう君」

「わ、私怖い話は苦手ですの」

シヤンが真つ青な顔で震えながら言う。

「大丈夫だよ、怖い幽霊じゃなかったから」

そう、雨が土砂降りだった、梅雨の時期、
小学生だった僕の前に、浮いている少女が現れたんだ。

「……不思議、なんで君は浮いてるの？」

『……不思議、なんであなたは私を見て怖がらないの？』

「え？……だって、優しそうだから」

『そう……あなた変わってるわね』

「ひどいなあ、それより、濡れるよ?」

『・・・いいのよ、どうせいつか乾くから』

「風邪ひくよ」

『ひかないわよ・・・だって私は　　だから』

「え?なに?」

雨でかき消された声、だが、由貴は気にせず、家に呼んだ。

「ほら入って」

『・・・おじゃまします』

「広いでしょ、僕の家なんだ」

すでにその時から一人で生活していた由貴、

一応一週間に一度、富宝から社員が見回りに来ていたが、その日以外は一人だった。

『・・・寂しかったの?』

「・・・まあね、迷惑だった?」

『・・・いいえ』

「ご飯食べる?何が食べたい?」

『……別に、あなたが決めて』

「わかった、ピザ頼むね」

『……いつもこんなご飯なの？』

「まあね、誰もいないから」

『……そう』

「……あ、雨が止んだ……」

『そうみたいね、じゃ、私は帰るから』

「うん……またね」

『……ご飯、ありがとう』

「どづいたしまして」

『……名前は？』

「富宝由貴、由貴でいいよ」

『そう……私は雨宮^{あまみや}、じゃあね、由貴』

「ばいばい」

それっきり、会うことはなかった……。

日々19「こんな精霊」

「……雨宮さんですか」

『はい、雨宮です』

「……なぜ今出てくるんですか？」

『……話せば長くなるわね』

しょうが反応に困って固まる。

「本当に久しぶりだね！元氣そうで良かったよ！」

相変わらずマイペースな由貴だが、

さすがに周りの人間は付いていけない。

物陰に隠れて震えている裕未、それをなだめる池波。

気絶して意識のないシャン、そして必死に起こそうと声をかける蓮、

そしてさつきから悪魔祓いの呪文を英語で唱えるルリ、

要するにまともに対応できるのがしょうしかいないというわけだ。

「……失礼ですが、幽霊ですか？」

『いや、違いますよ』

「え？……じゃ、あなたは？」

『神です』

「え！？マジ！？」

『嘘です』

心の中でうぜえと罵るしょう、

『ごめんなさいね、ちょっと遊んだわ』

「そうですね」

『私は精霊、水を司る水霊よ』

平然と言つる雨宮、

すると、さつきまで騒いでいたしょう以外のメンバーが急に静かに

なつた。

『・・・む？なんだ？なんだ？』

「幽霊では・・・ないんですね？」

裕未が恐る恐る聞く。

『いや、まあ、はい』

「なぐんだ、ま、そんな事だと思ってましたわ」

先程まで顔を真っ青にしていたルリが平然とする。

「全く、人騒がせですわね」

気絶していたと思われるシャンまで起き上がる。

『・・・何者だこやつらは？』

「いや、そう思つのはごもっともですが一番怪しいのはあなたですから」

しよが的確につっこむ。

『まあ、要するに私は精霊であり、由貴の守護精霊なんです』

「成る程、まあ由貴は不死身だし今更精霊の一匹や二匹はそう気になるもんじゃないな」

『すぐく図太い神経をもっているんですね』

「改めて言われるとムカつくなそれ」

どうも先程から毒舌が多いと思うしよがだった。

「さて、次の質問ですけど、何で由貴の守護精霊なんですか？」

『いや、だって一昨年契約をしたから』

「・・・あれ？そうだったけ？」

「どうせご飯を食べさせてもらったらそれは契約の儀式だったとか言うオチダロ？」

しえろが空気を読まずに言ってしまう。

『・・・お前最低だな』

「チヨ、言い当てたからってそこまで言うか？」

「ま、とりあえず、守護精霊なんですから、それはそれで良いですよ」

蓮が落ち着いていつの間にか宿題をしていた。

「ま、そうね、気にしても仕方ないわ」

ルリもどうでも良いかのように宿題をはじめ。

「あ、あの、どうぞよろしくお願いします」

裕未が丁寧な頭を下げる。

『・・・さすが、不死身の友だけあって物分りの良い奴らだ』

「ある意味それはそれで問題だな」

しろうが改めて自分の友達にまともな奴が少ない事を実感した。

「でも、まあ、そこが良いところなんだけどな」

『・・・おもしろいやつだな、お前も』

ここにいるやつら、全員が笑っている、

恐らく、一昨年の由貴は、こんな事想像もしなかっただろう。

仲間がいて、笑っていたなど・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6110c/>

不死身君の騒がしい日々

2010年11月3日13時55分発行